一度、興味を持ち始めたら、
とことん相手を分析し把握しようとする蜷川が、
今、表現者としてもっとも関心を持っているアーティストのひとりが、
ダンサーの森山開次さんだ。
その思いが募り、「talk・talk・talk」にご登場願い、観客の前で
様々な質問を浴びせた蜷川に対し、懸命の応戦をする森山さん。
さて、その結末は？

ダンサー **森山開次**

talk・talk・talk 第4回

演出家 **蜷川幸雄**

蜷川（以下N）　今日のゲストはコンテンポラリーダンサーの森山開次さんです。森山さんはあの髪の毛といい、何をどのように主張なさるのかを是非お話を聞かせて頂きたいと前から思っていた夢が叶い、本当に嬉しく思っています。森山さんどうぞ。（拍手）

　まず、なぜそういう頭になっているかですが。（笑い）

森山（以下M）目立ちたかったのですね、きっと。小さい頃はすごく地味に生きていて、どちらかというと人前に出ることは苦手でした。でも自分でも目立ってみんなの前で何かをしたいという憧れは沸々とありました。それをずっと押さえてきていたので、それが髪型というものに反映して、主張しようとしたのかもしれないですね。

N　俳優をやっていたのですよね。

M　舞台というものに突然興味がわいてきた時に、たまたま音楽座のミュージカルの『マドモアゼル・モーツァルト』の舞台を観たので、突然そこに飛び込んでしまいました。

N　それから今のようにコンテンポラリーダンサーに変わった契機は何だったのですか。

M　芝居とか歌の方に興味があったのにもかかわらず踊りにいってしまったのも自分でも不思議なのですが、身体がすごく硬かったのです。研究所の稽古場で、レオタード姿で惨めな姿をさらしている自分が許せなくて、とにかくきれいに涼しい顔をして足を高く上げて踊れることをその場ではしたかったのです。それにはともかく柔軟だと思って、お酢を飲んでみたりといろいろとやりました。

　僕はどうもマゾのようで、痛みを感じれば感じるほど燃えてくるというか、とにかく身体を縛ることから始めました。それがたまたま足首で、足首をベッドに縛って寝ることで柔らかくしていくとかということをやり、とにかく拷問状態を自分に強いて、足がなくなった夢を見ては起きるという……。

N　そうすると効果があるのですか。

M　絶対お勧めはできないですが、その時は少なくとも効果は出ました。

N　普通はそこまでやらないですよね。

M　今もその癖があって、だんだん内臓系までも鍛えることをやっています。身体のいろいろな所でも考えて、無意識にそういうことを探しているのでしょうか、寝ている時に知らないうちにストレッチをして、身体がほぐれて起きるというようなことがよくあります。

N　病気だ！（笑い）　ダンスを踊るということはそれほど身体に対して自覚的なんですね。

M　何かいろいろと自分の身体を知りたくなるのですね。

N　森山さんの公演『KATANA』を拝見しましたが、始め長い間片足で立っていますよね。あれだけ揺るがず、なおかつぶれずにいるということは、自分の中でどう保持していくのですか。

M　あれはすごく大変でした。蓄光※のばみりの所から暗転中を歩いていってから、そのばみりに足を置いて、明かりが入るまでに間がしばらくあるのですが、その間に1回足を上げ確認します。そして世界にすぐに入りたい所なのですが、なるべくリラックスするように心がけていました。

N　ああいう動きは、一人でいろいろな動きをやってみながら発見していくわけですか。それとも自然に出るものなのですか。

M　自然ではないです。ダンサーもアスリート的な所があってこんなことができないのだろうか、あんなことができないのだろうかといろいろ試すのです。そのうちにこんなこともできるようになった、あんなこともできるということが喜びでもあり、それが後から自分の表現のボキャブラリーになってきました。

N　身体的なボキャブラリーですか。

M　そうですね。

N　レーサーが走っていると音楽が聞こえて、青い空が見えるようになり、その時には全てが一体化するというのですが、演技もそこまで行かないかなあ、そういう集団ができたらいいなあといつも思うのです。それが奇跡的に成り立つのには言語があるからなかなかあり得ないと思いますが、ダンスなどでは見ていると紛れもなくそういう世界と同一化する瞬間があり、森山さんのを観ていても、あの人達はいいなあ、ある瞬間は世界と自分が一つになった瞬間があるのではないか、ということですごくうらやましいのですが、これは僕の妄想でしょうか。

M　確かに、身体を動かしているので自分の身体として実感がものすごくある中でいろいろなことを感じたり、一つになっていくことを確かに感じることはできますが、芝居などを観ていてもそういうように感じますけれどね。

N　森山さんのダンスを見ていると、身体ってここまでいくのだとか、ダンスの概念が大きく揺らぎます。それは衝撃的で、言葉を使う演劇では不自由さを感じたりします。言葉がない純粋さがあれだけ多様な身体的な言語を持っているのはすごいと思うから、ある種の憧れでしゃべっています。今日はありがとう。

M　こちらこそありがとうございました。

2006.12.9 彩の国さいたま芸術劇場 小ホールにて

もりやまかいじ。1973年神奈川県生まれ。21歳からダンスを始め、国内・海外での公演に出演する傍ら、幅広いジャンルで振付を担当。2001年ソロ活動を開始し、『夕鶴』『弱法師』など和の素材を用いた独自の表現世界を確立。昨年9月、ニューヨークで初演した『KATANA』の日本公演を好評のうちに終了し、今年6月にはヴェネツィア・ビエンナーレでボディ＆エロスをテーマにした新作を発表予定。NHK教育『からだであそぼ』出演中。

※暗闇でも定位置がわかるように、その場所につけておく蛍光の目印。

photo:幸田 森　構成：鴨澤章子

知らないと損する、コンドルズの楽しみ方

コンドルズ　埼玉スペシャル公演 2007

「太陽にくちづけ 007 トゥモロー・ネバー・ダイ」

※写真は『勝利への脱出』（2006年）ほか舞台写真より。©HARU

「コンテンポラリー・ダンスは楽しい！」と観客を唸らせ、
ダンスの概念を変えたコンドルズ。
ダンスに演劇や映像の要素を取り入れたエンタテイニングな公演は、
国内では常に満員御礼、海外でも大好評。
主宰する近藤良平は、NHKテレビ、CM、演劇等の振付でも活躍し、
メンバーはラジオや音楽活動等でも人気を集めている。
1年ぶりに彩の国さいたま芸術劇場に登場する彼らを、
たっぷり楽しむ方法をキーワードで紹介しよう。

文・稲田奈緒美

Keyword 1　映像、アニメがダンス公演に？

コンドルズの公演には、お約束の形式がある。その一つが幕開きの映像。映画館のCMやカラオケ映像を真似て古臭く、あるいはポップに仕上げた映像で一挙に彼らの世界へ引き込む。また、ノスタルジックな映像やシンプルなアニメをステージ途中にはさんで、フッと異次元へ誘う演出も心憎い。映像もアニメも手作りだ。

Keyword 2　キャラがなければダンサーじゃない

枠に収まらない自由さとエネルギーに溢れたメンバーは、個性も体形も髪形もバラバラで、「キャラかぶり無し」。キャラをいかしたコントでは、おとぼけ、熱血、傲慢、いじられキャラなどが登場してナンセンスな笑いを連発し、大、小、細、太そろった体形からにじみ出る身振りのダンスも披露する。際立つキャラの秘密は、彼らの素顔。その多くは俳優、会社員、小学校や高校の教員、自営業など意外な本職を持っているのだ。

Keyword 3　人形劇のシュールな世界も○

キャラが爆発するコントも楽しいが、大きな男達がちまちまと指人形やぬいぐるみを操り、声音を変えて演じる人形劇も秀逸。愛らしい人形達に反して、ストーリーはシュールでシニカル、ときに毒もあるから油断できない。ヘタウマ手作り感覚のキッチュな小道具や衣装も味わいの一つ。

Keyword 4　生演奏も聴き所のひとつ

最初はヘタウマ感覚で、トイ・ピアノ、ギターなどを演奏したり、ダンス音楽に使っていたが、次第に楽器が増えてバンドに拡大。音楽好きのメンバーは、ついに「THE CONDORS」としてメジャーデビューも果たした。

Keyword 5　ロックなダンスがやはり圧巻

実を言うと結成当初のダンスは、近藤を除いてお寒いものだった。しかし彼らは、モダンダンスなど既存のテクニックを美徳とせず、オリジナルなダンスを作り上げていった。近藤の振付の才能は、日常的な身振りを緩急自在に変換し、メンバーをスリリングにぶつかり合わせて、その反動や勢いを使ってダイナミックな群舞を構成する。そして生まれたのが、学ラン姿の男たちによるロックなダンス。映像、コント、演奏などの要素を繋いで公演を完成させるのが、身体が滾渕と語るエネルギッシュなダンスである。

いなたなおみ。舞踊評論家。幼少よりバレエを始め、様々なジャンルのダンス、ボディ・ワークを経験。大学卒業後、フリーライターを経て早稲田大学大学院文学研究科に進み、舞踊史、舞踊理論の研究を行なう。現在はバレエ、コンテンポラリー・ダンス、舞踏などの評論のほか、舞踊の理論と実践を結びつけた研究、教育活動に携わっている。

コンドルズ　埼玉スペシャル公演2007

「太陽にくちづけ007 トゥモロー・ネバー・ダイ」

昨年5月に上演された『勝利への脱出　SHUFFLE』が絶賛を博したコンドルズが、「太陽にくちづけ」シリーズの埼玉スペシャルバージョンで、再び彩の国さいたま芸術劇場に登場。今度はどんな舞台を見せてくれるのか。乞うご期待。

【日時】5月12日（土）　開演17:00／13日（日）　開演13:00／開演18:00

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【構成・映像・振付】近藤良平

【出演】青田潤一　石渕聡　オクダサトシ　勝山康晴　鎌倉道彦　古賀剛　小林顕作　高橋裕行　橋爪利博　藤田善宏　山本光二郎　近藤良平

【チケット（全席指定・税込）】　発売中

一般席 前売4,000円　当日4,500円　学生席2,000円／メンバーズ 前売3,600円　当日4,050円

構成：鴨澤章子